

Bankart&Bristow 変法術後の肩関節内外旋筋力推移の検討 —鏡視下 Bankart 法との比較—

○藤井 貴広^(PT) (ふじい たかひろ)¹⁾, 上谷 祥紘^(PT) ¹⁾, 仲見 仁^(PT) ¹⁾, 渡邊 健登^(PT) ¹⁾,
田中 誠人^(MD) ²⁾, 武 靖浩^(MD) ³⁾, 藏谷 幸祐^(MD) ³⁾, 林田 賢治^(MD) ³⁾

¹⁾ 第二大阪警察病院 リハビリテーション技術科

²⁾ 第二大阪警察病院 スポーツ医学センター

³⁾ 第二大阪警察病院 整形外科

【はじめに】

肩関節前方不安定症に対する術後理学療法目的として運動機能の改善が挙げられ、肩関節内外旋筋力の増強は同関節の動的安定性を獲得する上で重要とされている。本研究の目的は、Bankart&Bristow 変法 (BB 法) と鏡視下 Bankart 法 (ABR 法) において、術前後の肩関節内外旋筋力の変化を経時的に観察し、両術式間での改善の差を調査することである。

【対象・方法】

術後6か月まで筋力を測定可能であったBB法13肩とABR法11肩を対象とした。方法は術前、術後3か月、術後6か月にアニマ社製ミュータスF-1を用いて下垂位外旋 (ER1)、90°外転位外旋 (ER2)、90°外転位内旋 (IR2) の等尺性筋力を測定し、健患比を算出した上でBB法とABR法で比較検討を行った。

【結 果】

経時変化について、BB法のER1・IR2及びABR法の全ての肢位では術後3か月に比べ術後6か月で有意に改善し、BB法のER2においても同様の傾向を示した。また、ABR法のIR2のみ術前に比べ術後6か月で有意に改善した。一方、術式間の比較では全ての肢位・時点において有意差を認めなかったが、BB法では術後6か月のIR2が低い傾向にあった。

【考 察】

術後6か月での内旋筋力はBB法でやや低値を示し、ABR法で術前より著明な改善を認めた。これは肩甲下筋への侵襲の有無などが影響していると考えられた。今後の課題として、関節の動的安定性の獲得を考慮した術後プログラムを検討する必要があると思われる。